

フランスに併合されず、この併合の遅さのゆえに、以後たえず特別な地位を享受したことを、ここに加えておきましょう。

第二に、十八世紀末から二十世紀初頭までは、「フランス社会への統合」（再統合と言うべきかもしれません）という戦略を採りました。1787年には、1685年以来奪われていた市民権を、ついでフランス革命とともに、信仰と礼拝の自由、及び官僚や国家エリート内へ再び参入することを、ナポレオンの下では、改革派及びルター派の礼拝の公認をと、次々に権利を得ていきました。ただし、この公認は、カトリックに留まった国家による教会へのコントロールを意味していたことを、指摘しておきます。また、十九世紀には、慈善事業などの諸事業が大いに発展したことを、加えておきましょう。この社会への再統合の過程は、宗教面においては、同時に一種の征服の側面でもありました。十九世紀を通して、プロテスタントは次第に伝道の可能性を獲得し、この伝道は、一般に、カトリック教会から離れた非キリスト教的環境においてなされました。イデオロギーの面については、十九世紀後半にカトリック教会が態度を硬化させ、カトリック教会と共和派との争いも激化したため、プロテスタンティズムは、次第に政教分離（1905年に実現）を支持する側に回ります。国家の世俗性（laïcité）と呼ばれるこの解決方法は、今日においても国家の宗教的中立を想定しており、国家はいかなる礼拝をも公認したり、公的に援助したりすることはできません。プロテスタントにとっては、この解決方法の利益は、二重です。一方では、プロテスタントが大いに苦しめられたところの、カトリックの覇権の終結が公認されました。他方では、改革派教会（およびルター派教会）は、十六世紀以来享受することのなかった、国家の支配からの自由を獲得したのです。

少数派である、あるいは、そうあらざるを得ないと言う事実が、今日意味することについて、検討しましょう。まず指摘できることは、今日、この少数派としての地位は、その古さのゆえに、心理的・社会的に本質的なものとなってしまう、ということです。実際、フランスのプロテスタントは、少数派であることに慣れてしまい、諦めの境地にいるように思えます（ただし、フラ

ンス・プロテスタンティズムの歴史において、いつもそうであった、というわけではありません）。これと並んで、フランス社会（これは、次第に世俗化の傾向にあるのですが）も、プロテスタンティズムを、少数派に運命づけられたもの、として見るのが、当たり前になっています。この現象は、同様に重要です。そこには一つの利点があります。十九世紀末までは、フランス・プロテスタンティズムが予期しないほどに発展した場合には、これを危険視する多くの敵やライバル（特にカトリック）が現れたのですが、もはや、そういうことはないからです。しかし、このもはや脅威を与えないという現状は、否定的な面を含んでいるとも言えるでしょう。恐らく、プロテスタンティズムは、カトリックの国家アイデンティティに、もはやキリスト教として代わりうるものではないと、フランス人の目には映っているのでしょう。この指摘は次の質問を導きます。今日のフランスで、プロテスタンティズムは、いかなる戦略を採ることができるのか。そして、採るべき戦略なるものが、そもそも存在するのか。この点を次節で検討してみたいと思います。

B. 家系的 (de souche) 改革派の、地理的拡散

フランス・プロテスタンティズムは、過去の歴史において、地理的拡散を余儀なくさせられ、また、自らもその傾向を助長させてきました。そのことが、今日直面する最も深刻な問題の、一つの原因となっています。ここにおいても、まず、いくつかの歴史的事実を挙げることにしましょう。宗教戦争の後、十六世紀末に、改革派の人口集中が濃厚なままに保たれていたのは、ただ、幾つかの地方においてのみでありました。お配りした地図で、いくつかの大都市（小さい黒四角）と、とりわけ、北西部のノルマンディー・中西部のポワトゥーといったいくつかの地方、そして南西部と南東部の幾つかの地域がそうであることを、ご確認いただけるでしょう。このことは、人口が十分に多く、それゆえ共同体的な生活の、及び改革派としてアイデンティティの維持・発展が有利であるような地方が、実際にはほとんどなかったことを示しています。先述の地方以外は、至る所、地理的・人口的拡散が支配的でありました。それを